

平成 28 年 7 月 1 日
 地震調査研究推進本部
 地震調査委員会

岩坪断層の長期評価

これまでに行われた調査研究成果に基づいて、岩坪断層の諸特性を次のように評価した。

表 1 岩坪断層の特性

項目	特 性	信頼度 (注 1)	根 拠 (注 2)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	岩坪断層		
(2) 断層の位置・形状	断層の位置 (西端) 北緯 35° 24.3' 東経 134° 02.6' (東端) 北緯 35° 24.5' 東経 134° 9.0' 地表の断層の長さ 約 10km 一般走向 N88° E	△ △ △ △	地形の特徴から推定。 地形の特徴から推定。
(3) ずれの向きの種類	右横ずれ断層	△	地形の特徴から推定。
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	ほぼ鉛直	△	ずれの向き及び地形の特徴から推定。
(2) 断層面の幅	上端の深さ 約 0 km 下端の深さ 不明 断層面の幅 不明	○ — —	D90 による地震発生層の下限深さは 15-20 km程度。
(3) 断層面の長さ	不明		
3. 過去の断層活動			
(1) 平均的なずれの速度	不明	—	
(2) 過去の活動時期	不明	—	

(3) 1回のずれ量（注3）	1 m程度	△	文献1の経験式により推定。
(4) 平均活動間隔	不明	—	
(5) 過去の活動区間	全体で1区間	○	
活動時の地震規模			
(1) 活動時の地震規模（注4）	M6.5程度	▲	長さから文献2により推定。
地震後経過率			
(1) 地震後経過率（注5）	不明	—	

注1：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注2：文献については、本文末尾に示す以下の文献

文献1：松田時彦・山崎晴雄・中田 高・今泉俊文（1980）：1896年陸羽地震の地震断層. 地震研究所彙報, 55, 795-855.

文献2：松田時彦（1975）：活断層から発生する地震の規模と周期について. 地震第2輯, 28, 269-283.

注3：経験式（文献1）によれば、1回の活動に伴う変位量D（m）は、断層の長さL（km）を用いて、
 $D = 0.1L$ と表される。

注4：経験式（文献2）によれば、活動時の地震規模M（マグニチュード）は、断層の長さL（km）を用いて、
 $M = (\log L + 2.9) / 0.6$ と表される。

ただし、20km未満の活断層には適応できない可能性があるため、ここでは信頼度を▲とした。

注5：最新活動（地震活動）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

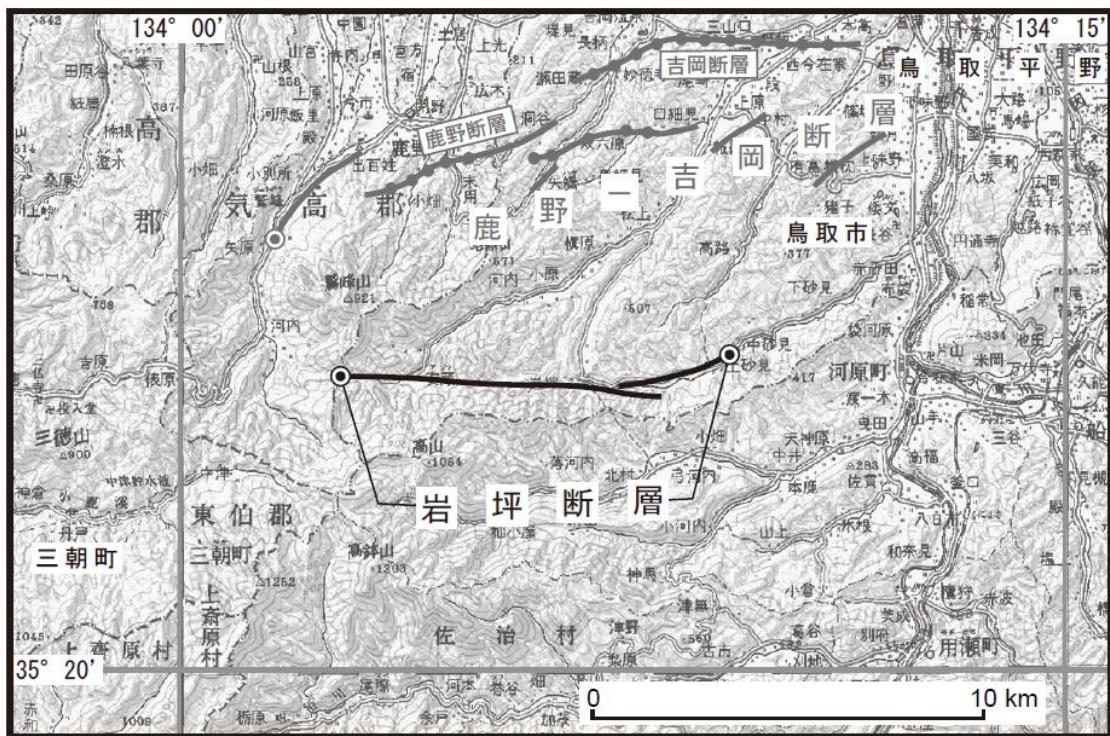


図1 岩坪断層の位置

●：断層の端点

基図は国土地理院発行数値地図 200000 「鳥取」、「松江」、「姫路」、「高梁」